

新日鐵住金(株)インタビュー(H27.5.28)について

釜石港臨海部に立地し、釜石港を利用している新日鐵住金(株)棒線事業部釜石製鐵所能勢総務部長に震災後のみなとの利用状況等についてお伺いしました。

同社は、主に自動車のタイヤ補強材に使用されるスチールコード用線材やエンジンのボルト用に使用される線材等の製造と、石炭火力発電所による発電事業を行っており、石炭や原材料及び製品の入出荷などに釜石港を利用しています。

新日鐵住金(株)
棒線事業部釜石製鐵所
総務部長 能勢大伸氏



～インタビュー要旨～ (聞き手:釜石港湾事務所長 古土井 健)

Q:釜石港をどのように利用しているのですか？

当所は釜石港に自社専用の棧橋(南棧橋、北棧橋)を持っており、ほぼ毎日、他製鐵所からビレット(鋼片)と呼ばれる線材の材料を入荷するとともに、工場で圧延した製品の出荷にも利用しています。当所の南棧橋は水深-14mを誇り、最大でケーブサイズ(18万トン)級の船の入港が可能で、月に1回程度、火力発電所用の石炭船が入港しています。以上に加え、釜石製鐵所が、他製鐵所から県内陸部の自動車メーカーに出荷される薄板鋼板や、沿岸部の復興プロジェクトに使用される鋼管杭等の中継基地としての役割を担っていることから、釜石港の利用の機会がますます拡大しています。

Q:東日本大震災の時の状況は？

津波により、全天候型バースや専用棧橋などの港湾主要設備が大きな被害を受け、工場敷地内も一部浸水しましたが、全国のメーカー・工事各社の皆様からご支援ご協力をいただいたおかげで、約1年後には全面的に復旧することができました。



全天候型バースの被災状況(写真1)



専用棧橋の被災状況(写真2)



インタビューの様子(写真3)



うねりの進入により冠水するバース(写真4)



荒天により船を沖だした日数の推移(表1)

Q:現在の釜石港利用の課題は何でしょうか？

湾口防波堤の災害復旧事業がある程度進捗したことから震災直後に比べればよくなりましたが、港内の静穏度は未だ回復していません。そのため、荒天の際にバースが冠水し船が接岸出来ないケース(写真4参照)や、波が治まるまで一時的に船を沖合に待機(沖だし)させるケースが増えています。(表1参照)

港内の静穏度が低いため、荷役中は船の縦揺れ、横揺れが大きいときもあることから、荷役作業や船の乗組員の安全を第一に、積荷の品質管理にも留意しながら荷役作業に取り組んでいます。

また、岸壁の地盤沈下等、震災前と状況が変わっていますので、荷役中に地震等が起こった場合の防災対策についても避難経路の見直しなど、きめ細かな対応を進めているところです。

Q:今後の釜石港に望むことは何でしょうか？

湾口防波堤が完全復旧すれば、市街地や港湾設備の防災上のリスクが大幅に低減し、住居の再建、水産業の復活など街の復興にも弾みがつくものと思います。当所においても船舶による荷役作業を安全かつ効率的に行うことが出来るようになり、弊社の製品をより早くより安全にお客様のもとへお届けできるものと期待しております。釜石市にとって重要な防災基盤、物流基盤、さらには産業基盤として一日も早い湾口防波堤の復旧をお願いしたいと思います。

< 参考 >

釜石港湾口防波堤は震災による津波被害により被災しました。現在は、当事務所が、平成29年度の完成を目標に災害復旧事業を実施中です。みなとの安全・安心確保のため、早期の復旧に向け鋭意工事を進めて参ります。

能勢総務部長様 お忙しいところインタビューさせて頂き、ありがとうございました！